

## 令和元年度 校内研究のまとめ

学校名 : 日南市立細田中学校

### 1. 研究主題・副題

自ら分かろうとする生徒の育成  
～多様な学び合いを取り入れた指導の工夫を通して～

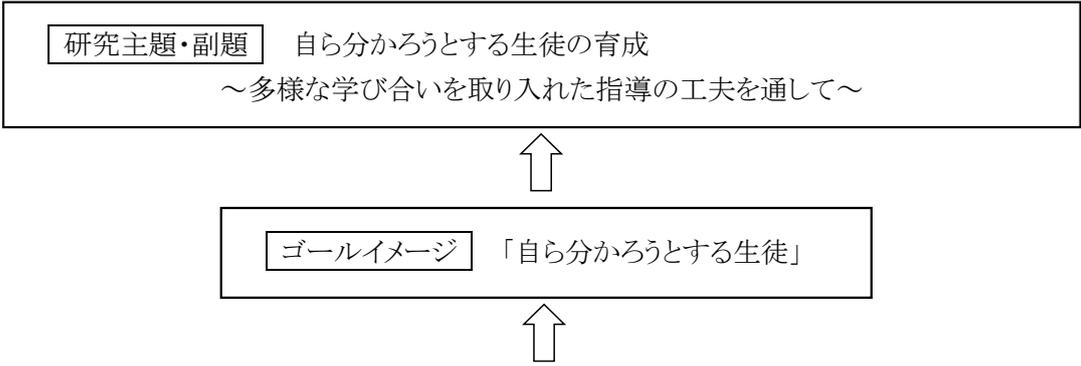
### 2. 主題設定の理由

昨年度の校内研究の成果として、各教科において、県の「授業改善の新4+4のチェックポイント」の視点を達成できるような授業の展開がなされ、一人一人の授業を参観できた点良かった。その中で、個人で考える場面とペアやグループなど集団で考える場面の時間を設定することで、生徒が互いから学ぶ姿勢を身に付け、「学び合い」が活発になったり、学習内容の理解を深めたりするだけでなく、人間関係の醸成にもつながった。また、発展的な問題では「書く」ことを意識させた問題を作成し、他の意見を参考に自ら考え、文章にまとめることを通して、作業活動だけでなく、生徒自らが課題に向き合うような指導が展開された。

一方、課題として、一人ひとりが目的をもって対話的な場面に臨めるような授業の改善や、学年によっては「学び合い」が分からないところを「教え合う」場になっていたようなので、今後は「深い学び合い」にするための工夫が必要である。そのためには、課題提示の工夫や基礎的・基本的な内容の定着を図るために、習熟や個別指導の時間確保を指導過程の中に位置づけていく必要がある。

そこで、今年度は、継続して「学力向上」に関することを実施していくこととした。昨年度の課題の中で、「深い学び合い」へのステップアップや「教え合い」の是非が課題としてあげられたが、今年度の生徒の実態を踏まえ、教科の特質を生かしつつ、「対話的な学び」を重視し、「教え合い」もOKとして、多様な学び合いの枠をより広げた指導を行うことで、生徒は自信を高め、理解が深まり、学習意欲の向上につながると考えた。

### 3. 研究の全体構想



#### 研究内容

- ① 教師全員による授業研究会の実施
  - ・ 自力解決の場面と学び合いの場面の設定
  - ・ 授業の構造化を図る授業実践 ; 学習課題の設定、学び合う時間の確保、授業の振り返り
  - ・ 評価シートを活用した事後研究会 ; 評価項目に「授業改善の keyword」(個々の教師の授業に対するチェックポイント1~4、学校の組織的対応に対するチェックポイント3・4に対応)を入れ込む。
- ② 朝学習の活用(読書・5教科);授業改善の keyword(学校の組織的対応に対するチェックポイント2)
- ③ 分析 ; 授業改善の keyword(学校の組織的対応に対するチェックポイント1)の実施
  - ・ 生徒の実態アンケートの実施・分析
  - ・ 全国学力学習状況調査やみやぎ学習状況調査の分析
- ④ 家庭学習のすすめ方
  - ・ 「ライフスケッチブック」と「家庭学習の手引き」の活用
  - ・ 家庭学習の定着(学期1回の家庭学習充実週間の活用)

#### 4. 研究の実際

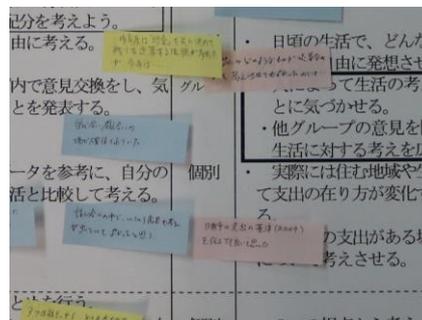
##### (1) 教師全員による授業研究会の実施

教科	英語科	生活単元科	理科	社会科	数学科	保健体育 (体育科)	国語科
担当者	宮下	横山	中村	岩倉	阪本	山下	清田
実施日	R1.10.9	R1.11.12	R1.11.13	R1.12.3.	R1.12.4	R1.12.10	R1.12.18

\* 全ての教科で研究授業を実施するとともに、参観者は 9 つの評価項目において 5 段階評価を行い、付箋紙に良い点・改善点・その他について授業者の視点を元に意見を記入した。事後研修では授業者が反省を行った後、持ち寄った評価シート及び記入した付箋紙を使って、拡大印刷した学習過程に貼り付けながら 3 つの項目について意見を出し合い、授業者にフィードバックした。



<数学科 授業の様子>



<研究授業 事後研>

##### (2) 朝学習の活用

水曜日以外の 4 日間、8:00~8:15 に読書と 5 教科をそれぞれ一週間交替のローテーションで実施する。

内容 ; 各学年で不足している基礎的・基本的な内容を、教科担任が内容を精選する。

形態 ; 自力で問題を解く → 自己採点・やり直しをして提出。

##### (3) 分析

###### ① みやざき小中学校学習状況調査の自校分析

###### (1 年)

国語	<ul style="list-style-type: none"> <li>正答数は小学 5 年次からあまり変わっていない。</li> <li>B 問題記述式の問題の正答率が低い。</li> </ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"> <li>A・Bともに極端に落ち込んでいる生徒はほとんどいない。</li> <li>Aについては、正答数の幅が 10~13 とコンパクトにまとまっている。</li> <li>Bについては、12 名中 8 名が県平均と同じか、上回っている。</li> <li>A・Bともに県平均を下回って (-40~+10) おり、全体的にマイナス寄りである。</li> <li>Aについては、県平均を上回る生徒はいない。</li> <li>Bについては、12 名中 4 名が県平均を下回っている。</li> </ul>
数学	<ul style="list-style-type: none"> <li>A問題では、12 人中 8 人が平均以上。平均に満たない生徒が 4 人。</li> <li>A問題では、小学 5 年時と比べて、平均以上の生徒が 2 人増加した。</li> <li>B問題では、平均以上の生徒が 12 人中 3 人しかいない。</li> <li>B問題では、小学 5 年時と比べて、平均以上の生徒が 3 人減少した。</li> </ul>
理科	<ul style="list-style-type: none"> <li>A問題では、極端に正答数が少ない生徒はいない (9 問~16 問の間)</li> <li>A問題では、県平均を超えている生徒が 5 名いる。</li> <li>B問題では、正答率が 5 割を超える生徒が 2 名いる。</li> </ul>

(2年)

国語	<ul style="list-style-type: none"><li>・ B問題記述式の問題の正答率が低い。</li><li>・ 昨年度の中学1年次よりも正答率は上がっている。</li></ul>
社会	<ul style="list-style-type: none"><li>・ A・B合計で見ると、グラフの分布が全体的に右寄りになってきた。</li><li>・ Aについては、10名中6名が県平均を上回っており、平均の差が-50から-10に縮まった。グラフの分布が全体的に右寄りになってきた。</li><li>・ Bについては、平均の差が-80から-20に縮まってきた。</li><li>・ Aについては、10名中4名(10.0~11.0)が県平均に届いていない。</li><li>・ Bについては、10名中1名しか県平均を上回っていない。(9名が3以下である。)</li></ul>
数学	<ul style="list-style-type: none"><li>・ A問題では、12人中6人が平均以上。平均に満たない生徒が4人。</li><li>・ A問題では、小学5年時と比べて平均以上の生徒数は変化していないが、平均+30の生徒が1人いる。(小5ではいなかった。)</li><li>・ B問題では、小学5年時と比べて平均以上の生徒数が1人増加した。</li><li>・ A問題では、平均-30の生徒が2人いる。(小5ではいなかった。)</li><li>・ B問題では、平均-40の生徒が5人もいる。(小5では2人だった。)</li></ul>
理科	<ul style="list-style-type: none"><li>・ A問題では、極端に正答数が少ない生徒はいない(9問~16問の間)</li><li>・ A問題では、県平均を超えている生徒が5名いる。</li><li>・ B問題では、正答率が5割を超える生徒が2名いる。</li><li>・ A問題では、県平均を下回っている生徒が7名いる(過半数)</li><li>・ B問題では、8割の生徒が県平均を下回っており、正答数0も3名いる。</li><li>・ 全体的にマイナスの方によっている。</li></ul>
英語	<ul style="list-style-type: none"><li>・ AとBで、それぞれ県の平均正答数(Aは12.3、Bは2.4)を上回っている生徒がそれぞれ5名ずつである。</li><li>・ Aの正答数が10以上の生徒が8名で、Bの正答数が3以上の生徒は5名であった。</li><li>・ Bの正答数が1つ、または2つの生徒が5名であった。</li><li>・ やや長い英語の文章を読んで概要を理解したり、初歩的な英文を書いたりすることが落ち込みを示す生徒が多い。</li></ul>

② 全国学力・学習状況調査の分析・今後の取り組み

- ・ 学年全体の平均が全国平均よりプラスになっている。
- ・ 2年時のみやざき学習状況調査の平均と比較して、マイナスの生徒が7名から4名に減った。
- ・ 平均と比べマイナスになっている4名は生徒の平均との差がかなり大きいので、今後も授業中や家庭学習を通して定着や習熟の機会を設けることで基礎基本の定着を図り、成績の底上げにつなげたい。

③ 自校分析を生かした取組及び4+4のチェックポイントの取組について

1年	<p>(国語) 惜しい誤答となっているため、解答の精度を上げるために記述の問題に多く取り組ませる。</p> <p>(社会) Aについては、基礎・基本の定着の時間等を確保し全体的な底上げをしていく。Bについては、自分の考えをまとめ、文章で表現できるような習熟の時間を確保していく。</p> <p>(数学) 基礎基本(A問題)は伸びてきつつあるので、引き続き小テストを繰り返しながら技能を伸ばしていく。応用問題(B問題)については、小5と比べて落ち込んできているので、個人で思考させた後に、他の生徒と考えを交流させることで、様々な考えに触れ、自分の考え方を練り直す機会をつくっていく。</p> <p>(理科) 授業や宅習で、復習を重ねることで、全体として基礎基本の定着をはかり、学力の底上げを図る。B問題では、文章で表現する力をつけさせるために、最終的にはめあてに対するまとめを自分の力で作り上げることができるようにする。その際に、スモールステップでゴールに近づいていけるようにする。また、書いためあてとまとめを声に出して読ませることで、文章を早く正確に読み取る力の育成を図る。</p>
----	---

## 2年

(国語) 惜しい誤答となっているため、解答の精度を上げるために記述の問題に多く取り組ませる。

(社会) Aについては、現状通り基礎・基本の定着を繰り返していく。

Bについては、前回よりは書くことには慣れてきているので、資料分析を文章表現できるように工夫をしていく。

(数学) ABともに、上位層が増えているが、下位層も増え、二極化が進行している。全員が同じ内容で学習を進めていくのではなく、適宜評価しながら必要に応じて、上位層・下位層にそれぞれ適した課題を設定していく。

(理科) A問題において、小テストなどの習熟に重きを置くことで、基礎基本の定着をはかり、さらなる学力の向上をはかる。B問題においては、前回よりも上昇が見られるので、引き続きまとめの文章表現を自力で行えるような手立てを行う。

(英語) 教科書の本文等を読む時間(声に出して読む)を増やし、機会があることに自分の意見や感想を短い英文で表現する時間をつくる。

### ④ アンケート分析

#### 【国語】

1・3年生はグループでの学習形態を好んでいるが、2年生は一斉学習を好んでいる。2年生の授業は10名以下で行うため、多様な意見交換がスピーディに行える環境を望んでおり、コの字型や対面形式での一斉学習を試していく必要がある。

#### 【社会】

学習形態は、一斉授業が学習しやすいと考える生徒が多い。意見発表がしやすく、多様な意見に触れることで自分の思考の幅を広げられるようである。ただし、先に個人でじっくり考えた上で発表を望む生徒が増えてきた。今後は、単元や学習課題に応じて学習形態(ペア・グループ)を工夫し、より深く問題解決に取り組ませる必要がある。

#### 【数学】

アンケート結果を見ると、3学年ともに「一斉」「グループ」「ペア」を希望している生徒が多く、「個人」を希望している生徒は少なかった。意見としては、「いろいろな解き方が分かる」「教え合える」「一斉の方が頭に入りやすい」などが挙がっている。授業では、基本的に生徒の発言を引き出しながら、「一斉」の形態で進めている。その中で、全体的に理解不十分と思われる時には、「ペア」や「グループ」にて短時間で確認しあう場面を設定している。演習の時間は「個人」で取り組んだ後「一斉」で解説している。

#### 【理科】

3学年ともにグループ学習を望む生徒が多かった。教科の特性上3~4名のグループでの授業形態になり、どの学年の生徒もその形がしっくりきているようである。3年生の3学期の授業は、受験対策のためやむを得ず教室での一斉授業が増え、理科室におけるグループ授業を望む声が多くなったことから、アンケートの結果と合致しているといえる。2年生の場合は「みんなで授業を受けた方が分かりやすい」や「いろいろな意見が聞ける」などといった理由から、一斉がいいという声も比較的多かった。3学年ともにペアや個人での授業を望む声はほとんど無かった。教科の特性とアンケートの結果を踏まえ、今後もグループ形式を軸に授業を進めていく。

#### 【英語】

一斉の授業展開では、他の生徒の意見を多く聞くことができ、参考にしているようである。また、個人で学習したいという考えもあるようである。グループやペア活動においては、分からない発音や単語の意味を質問しやすいようである。

### 5. 研究の成果と課題

#### 【理論研究班】

- 各教科で「主体的・対話的で深い学びの実現に向けての教師の視点」を見直したことで、子どもが見通しをもちつつ、協同的な学びを通して多面的に考察したり、自分の考えを広げたりする授業の構築を図ることが出来た。
- 指導案に県からの「4+4のチェックポイント」を意識した表現を入れたことによって、子ども一人一人に応じた授業の展開がなされた。

- 相手の意見を聞く、ノートのとめ方を工夫するといった、「学習の基盤となる態度や能力」について、生徒によっては個人差が見られたため、教師の支援の在り方を工夫・改善していかなければならない。
- 「対話的な学び」について、2年間、継続して研究してきた。これを受け、次年度は「深い学び」に繋げていかなければならないのではと考えている。そのための研究を深めていかなければならない。

#### 【実態把握班】

- 「学び合い」を通して、自分の考えに自信を持つ生徒が増え、友だちを認め合う関係づくりが、すべての学年において向上した。今後も「学び合い」を継続させる。
- 教科担任の先生による宅習点検は、家庭学習の改善につながっている。(家庭学習ノートの掲示が意欲につながっている。)
- 学習形態ではグループが学習しやすい状況である。グループであると、他の意見をよく聞いて参考にできるし、自分の意見を言いやすいようである。
- 授業における「めあて」・「まとめ」・「振り返り」の段階が分かったかについて、「とても思う」生徒よりも「まあ思う」「あまり思わない」と考える生徒が増えているので、指導者が、指導過程の段階がはっきりするように指導する。
- 学年によっては「学び合い」の配慮や工夫が必要である。  
LSBの活用が1つの学年はできているが、2つの学年においては活用が不十分である。LSBの活用ができているか見届けが必要である。
- 「家庭学習の手引き」の活用において、2つの学年においては活用できていない生徒が40%になっている。「手引き」の活用が浸透していないので、家庭学習充実週間等に配付して、活用を図る。

#### 【各教科から】

- 「学び合い」のよさを生徒が実感している。自分の考えに自信をもち、互いの考えを認め合う関係ができている。
- 学習活動の内容や生徒の実態に応じて、常に効果的な学習形態を選んで実践していることが、生徒の学習意欲や内容の理解に影響している。
- 個人思考にじっくり取り組むことで、集団での活動「学び合い」が活発になった。個人では解決が難しく、より深い思考を必要とする場面では、ペアやグループ活動を積極的に取り入れることで、意欲的に学習に参加する一助となった。
- グループ活動を行うことで、他者の意見を参考に考えをまとめ直し、それを文章にまとめる作業ができた。
- 実験を効果的に行い、学びあいの場を確保できたことで、生徒の学習意欲や取り組みの向上につながった。
- 本文の音読練習や会話文の音読練習では、ペアによる学習で、発音の分からないところを教え合うことができるようである。
- 一斉の場合でも、学習内容によっては(発音、単語・連語の意味、英問英答など)分かりやすかったという意見が上がっている。
- 「グループ」や「ペア」の学習形態において、学習内容の分からない個所を質問し合っているかが課題となる。分からないときは、質問する姿勢を育成する指導が必要である。
- 一斉学習場面が多くなり、効果的に「学び合い」の時間を取り入れることができなかった。
- 「個人」を希望する生徒が少ないということは、自力解決までたどり着けない生徒がいるということでもあると考えられる。「個人」で粘り強く考える姿勢も指導していきたい。
- 1年生は、「グループ」の希望が他学年に比べて少なかった。学力の二極化が激しい集団であるので、どちら側の生徒にも充実感を感じられるような指導の工夫が必要である。
- 授業中に演習や定着の時間をあまり確保することができなかった。事件の準備の時間等を含め授業内容の精選・改善が必要である。
- 朝学習を今年度5教科で実施したが、今ひとつ成果が上がらなかった。来年度は読書活動とNIEにしぼって実施する予定。
- 家庭学習の手引きがよりよく活用できるように改善や動機付けを行う必要がある。